

く、バイコン自身本作品を執筆するにあたって、ナターレ・コンティの『神話学』やボカッチョの『神々の系譜』等ほかの神話解釈の書を参照している。

しかしバイコンは神話解釈が流行であるという理由ではなく、神話に固有の価値を認めたからこそこの著作を残した。神話には秘儀的な教えを隠し且つそれを効果的に伝えるという言語的な役割があるのと同時に、人々と神々の交流を結ぶ宗教的役割があるとバイコンは認める。宗教は比喩や寓意等の「ヴェール」や「影」を楽しむものであるため、それを奪い取ること、もはや神々と人々の交わりを禁じるのに等しい。同時に、神話の語りはときに突飛で辻褄があわないため、その起源は非人間的あるいは神的なものではないかと想定される。そのため神話は「聖遺物」と形容され、詩や歴史的記述とも異なる神々の「ささやき」として位置づけられる。こうした性質の神話を解釈するとは一体いかなる意味をもつのだろうか。

『古代人の知恵』におさめられたプロメテウス神話に対する解釈を紐解くと、バイコンが神話解釈を介して何をしようとしていたかが明らかになる。プロメテウスは人を土と様々な動物の粒子からつくり、人を守るために火をもたらす。しかし人間はこの創造主であるプロメテウスと火をユピテルの前で弾劾する。ユピテルはこれに喜び人に永遠の若さを受けける。一方、プロメテウスはユピテルへの捧げ物に敢えてガラクタを混ぜ、不敬をはたらいたため、コーカサス山につながれ、日々肝臓を鷹に摘まれる。バイコンはこの物語にそれまでなされなかった独自の解釈を施す。彼によれば、この話は人が世界の中心であり、

人は現状の自然や技術を批判的に捉え、更なる改善を求めるべきであると教える。神と人の交流を保つために重要だとされた神話の語りは、こうして学知と技術の発展を奨励する言説として用いられる。神話に隠された意味を読みこみ開示することによって、バイコンは自らの理想や理念をいわば「神化」させるのである。

以上のようなバイコンの神話解釈の手法には、想像力のはたらきが意識されていると考えられる。なぜならば彼の考えによれば、宗教は常に比喩や象徴、寓話を用いて人の精神に近づこうとし、想像力を理性の及ばないところに高めようとするからである。例えばカトリック教会は祭式や呪文、偶像を用いて人々の想像力を強め、信心を高めようとする。バイコンはこれを批判する一方で、自らの神話解釈には自由に想像力を用いる。こうした矛盾は彼の認識論によって説明される。人間の精神において想像力は理性に勝って支配的になり得るという認識論的な位置づけが確立されていたからこそ、バイコンは神話解釈を介して自らの理念の神化を行うことができたのではなかろうか。ある寓意を神と人の間にあるものとして読み込むという解釈の自由は、人間の精神において支配的な想像力に委ねられ、それが理念の神化あるいは宗教化を可能にしたのだと考えられる。

ジャンセニウスの「純粹本性の状態」概念批判

林 伸一郎

本発表は、ジャンセニウスがその主著『アウグステイヌス』第二巻で批判することになる、一六世紀スコラ神学において結

晶化した一概念——「純粹本性の状態 status purae naturae」——について、それが登場してくる神学上の文脈とこの概念の具体的内容について概観することを目的とするものである。それゆえ、ジャンセニウスがこの概念に対して展開した批判の内容にまでは踏み込まない。

この概念出現の背景にあるのは、プロテスタントの登場によってカトリック神学界が「キリスト教信仰の第一の基礎」とも言われる原罪と義化の教説の再検討を迫られたことである。すでにトリエント公会議第五、第六総会でカトリック教会の立場は確認されたが、神学者たちはさらに明瞭に理解しようと努力する中で、原罪によって人間本性が本質的に損なわれたとするプロテスタントに対して、原罪と義化の基体となる人間本性固有のありようから出発して、それらを説明しようとする視点が生じたのである。例えば、D・ソト（一四九四—一五六〇）は「純粹に自然本性的な能力の中に想像された人間」——「罪も恩寵もたず、いかなる超自然的賜物も持たない理性的動物」——から出発して、「原初の義に創造された人間、そこから罪に転落した人間、恩寵の中で修復された人間」を説明しようとしている。さらにイエズス会の神学者R・ベラルミーノ（一五四二—一六二二）は超自然的賜物が付与される基体としての自然本性という視点から、原罪についてのカトリック教会の立場を、ルター派・ペラギウス派のそれとの対比によって浮き彫りにした。このような過程の中で、F・スアレス（一五四八—一六一七）は、「純粹本性の状態」という仮設を、「完全な本性」と「墮落した本性」という歴史的状態の「基礎」として明確に

位置づけた上に、それを一つの目的論的次元として結晶化させたのだった。

スアレスによるこの概念の結晶化への重大な障害となりえたのは「神の似像」としての人間の規定であった。それは「超自然的究極目的への自然本性的欲求」を認めるもので、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、スコトゥス、ソトなどが認めている、いわば伝統的な人間理解であつたからである。それに対してスアレスは、（一）超自然的・自然本性的という二つの究極目的の区別、（二）「自然本性的欲求は空しいものではない」という命題のアリストテレス的解釈（自然本性的欲求と自然本性的究極目的の釣り合い）から、この「自然本性的欲求」の存在を否定し、（三）二つの目的論的次元それぞれの構成原理——自然本性への負債と神の無償の愛——を明らかにして、自然本性的次元⇨純粹本性の状態を創造の基礎的状态と位置づけるに至る。スアレスにおいて、人間はもはや自然本性的に超越に開かれていた宗教的存在（神の似像）ではなく、一自然的存在に過ぎない。

超自然的次元を切断して、「裸の人間」を考察しようとする視点は、この時代以降、神学者ばかりに見いだされるだけでなく、モンテーニュやデカルトといった世俗的思想家にも見いだされる。だが、「純粹本性の状態」という概念自体、それを批判する立場——悪を自然本性的善の欠如として、善の存在論的先行性を主張するアウグスティヌスに立脚し、原罪⇨悪を理解するためにはまずその前提となる自然本性の完全性を理解しなければならぬとする立場——との論争の中で彫琢されたもの

である。その立場に立つ一人がジャンセニウス(一五八五—一六三八)であった。「純粹本性の状態」という近世スコラ神学の一概念は、この時代に人間がいかに理解されていたのか——人間は本質的に超越に開かれた宗教的存在なのか、それとも自然的次元に自足する存在なのか——、自然と超自然の関係性はどのように表象されていたのか、といった問題群に関わる概念なのである。

神学的後衛としてのエルンスト・トレルチ

小柳 敦史

一九八〇年代以降、いわゆる「自由主義神学」の再評価が進み、その成果はドイツのみならずわが国でも相当程度認知されてきているように思われる。それに伴って、「自由主義神学」から「弁証法神学」への移行の過程についても見直しがなされてきた。弁証法神学と呼ばれてきた神学運動(の特に初期)の担い手について、彼らがヴァイマル期ドイツの知的世界に登場した「前衛(アヴァンギャルド)」、あるいは「前線(フロント)」「世代」の一員として、「表現主義」的な宗教的言説を展開したと理解する視点が提示されている。本発表は従来の研究を補う視点として「後衛 *arrière-garde*」という概念を紹介し、エルンスト・トレルチを例にその妥当性を検討するものである。

「前衛」が元々は最前線を切り開く部隊を指し示す軍事用語であった(そして、「前線(フロント)」と実質的には同じ意味を持つ)ように、「後衛」もやはり軍事用語であり、それは「引き延ばし戦」あるいは「撤退戦」を戦う「しんがり」の部隊を

意味する。ウィリアム・マルクスやアントワヌ・コンパニオンは、早くは一九一〇年代に、主としては一九三〇年以降の文学者や思想家の中に自らの立ち位置を「後衛」とみなし、「前衛」から距離をとる人々が現れることを明らかにした。その最も自覚的な姿は晩年のロラン・バルトに認められる。彼の願いは「前衛の後衛」に位置することだった。バルトは言う。「前衛であること、それは何が生んだのかを知っていることです。後衛であること、それは死んだものをなお愛することなのです」。こうして、常に新しいものを求める前衛と共に古いものの死を看取りながら、死に行くものへの愛着により、前衛とは距離を置くことになる「後衛」の姿が明らかにになる。

このような「後衛」の位置に、カール・バルトラ神学的前衛たちを見つめるトレルチを置くことができるだろう。若きトレルチは「宗教史学派」の一員として、神学に歴史的方法を全面的に導入することを目指す「前衛」であったが、第一次世界大戦前後の「学問における革命」のうねりを目の当たりにして、歴史的方法や学問性にこだわるのが今や時代遅れであることを自覚する。「我々の学問的営為においてはとても多くのものが生氣を失い慣習的なものになってしまっていて、世代交代は否定しようがない。しかしながら、この交代は厳密な、そして本来的に秩序あり実証的である学問との接触を再び見出すだろうし見出さなくてはならないと、私は信じ、かつ望んでいる。」(Ernst Troeltsch, *Die Revolution in der Wissenschaft*, in: *Kritische Gesamtausgabe Bd. 13, S. 561f.*) 学問の革命に対して共感を持ちつつも、実証的な学問、具体的には歴史的方法を